



学校通信 赤坂小だより

令和6年度 第9号 R6.7.10

北九州市立赤坂小学校

校長 大成 清徳

☆学びを深める～ゲストティーチャーをお招きして

①【6年生】戦争体験を語り継ぐ

◎7月5日(金)2校時、地域にお住いの杉野慧子様に来ていただき、1945年にご自身が体験された八幡大空襲についてお話していただきました。

八幡大空襲

○太平洋戦争中の1945年8月8日午前10時頃から、米軍爆撃機B29が現在の八幡東区を中心に行った大規模な攻撃。221機のB-29が来襲し、45万発を超える焼夷弾を使用した戦略爆撃を行った。八幡は火の海となり市街地の21%が壊滅した。八幡東区小伊藤山の横山防空壕では避難した市民約300人が窒息死、焼死。この空襲による死傷者数は約2,500人。



〈空襲で被災した八幡市西本町〉

「当時私は、小学校2年生でした。その日の朝、5回にわたる空襲警報にただならぬ気配を感じた母親が、学校から姉を呼び戻し、押入れの下に飛び込みました。上の段に燃えにくい綿の布団が重ねられていたからです。

そこに、B29から投下された焼夷弾が降り注ぎます。その衝撃はすさまじく、八畳の畳が30cmも



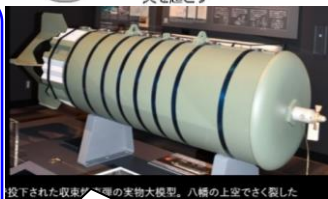
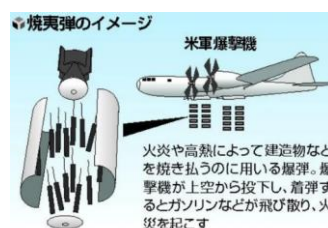
浮き上がるほどの振動でした。いざという時に備えて貴重な米2合と缶詰を入れたリュックを背負う時間もないほど、火の手は迫ってきます。空襲の爆炎と家々が燃える煙で、あたりは真っ暗。足元しか見えない中を、姉とはぐれながらも、母親と桃園球場に向かって必死に逃げました。その途中、鮮やかな黄色い花を咲かせていたひまわりを見ますが、ほんの一瞬の後、再び見るとすっかりしおれています。空襲による熱で、花の水分が蒸発したためと思われます。それだけの熱気の中でしたが、死の恐怖から不思議と熱さは感じませんでした。

その後、被災した人々であふれる土手から駆け下りて来た姉、仕事先から球場にたどり着いた父親とも再会します。見渡す限りの焼け野原で、自宅は焼失。帰る場所を失った私たち家族は、わずかに残った炒った大豆を分け合って何とか飢えをしのぎました。」

こうした辛い体験を、涙をこらえながら語ってくださった杉野さんの思いに答えて、6年生は次のような感想を綴っています。

- ・とても怖くて思い出したくない記憶を、私たちに話をしてくださって、戦争のおそろしさ、平和のありがたさを考えることができました。
- ・「戦争があつてはいけません。」とおっしゃった時、私も泣いてしまって、そのくらい戦争のおそろしさ、苦しさをはつきりと知ることができました。
- ・今、自分があたりまえだと思っている食料、家、安全はあたりまえではないと知って、今の暮らしを大切にしようと考えさせてくれた杉野さん、本当にありがとうございました。
- ・これから世界を作っていくのは、ぼくたちみたいなわかい人たちです。ぼくたちで戦争をなくしていきたいと強く思いました。

「話を真剣に聞いてくれた6年生の熱い瞳に感激しました。」とおっしゃってくださった杉野さん。今の平和を守るために、悲しい過去について学び続けていきたいと思います。



八幡大空襲で投下された焼夷弾1180トン。小倉北区の「平和のまちミュージアム」には焼夷弾の実物模型の展示と、この空襲をこれまでにない臨場感で追体験できる360度シアターがあります。夏休みに訪れてみてはどうでしょう。

②【5年生】世界に目を向けて

◎6月27日(木)と7月5日(金)の5・6校時、5年生は、NPO 法人「ロシナンテス」の川原佳代様をお招きして、アフリカの人々の暮らしやロシナンテスの活動について、体験に基づく貴重なお話を聴くことができました。



◇ロシナンテスとは

2002 年、北九州市出身の川原尚行さんは、大使館の医務官としてスーダンに赴任しました。しかし、日本政府は当時内戦中のスーダンへの援助を停止していたため、目の前で苦しむスーダンの患者さんを救うことが許されなかったのです。川原さんは外務省を辞して、スーダンで医療支援を始めました。これが、ロシナンテスの活動のきっかけです。ロシナンテスは、アフリカで医療施設のない村々を回って医療を提供したり、国や地域と協力しながら診療所をつくるだけでなく、給水所の整備や学校建設、栄養改善など、包括的な保健事業を整備することで、現地の人たちだけで医療を継続できる仕組みづくりをしています。

◎私たちは、蛇口をひねるときれいな水が出る暮らしを、当たり前と感じています。しかし、世界の中には、毎日何時間もかけて水のある場所まで水汲みに行かなければ手に入らない地域や、暮らしの中で濁った水を普通に使

っている地域があります。川原さんたちは、そうした国や地域に赴いて、そこで暮らす人々が、自らの手で生活を改善させられるよう、「医療」「水」「教育」を整備するための活動を行っています。

現地の人々との様々な出会い、日本とあまりに違うアフリカの現実、同じ国に住む人同士が争う内戦により、それまでの暮らしが一瞬で崩れ去る恐ろしさ、その中でも、希望を失わずに立ち上がろうとする人の姿など、多くの写真を交えてお話していただきました。川原さんのお話の中で、2つのキーワードが印象に残りました。

- ① 「当たり前」：私たちが当たり前と思っているモノや事柄は、決して当たり前ではない。何年もかけて作り上げてきたものが一瞬で失われることもある。それを守り続けることが大切です。
- ② 「これから」：日本には、いろんなチャンスがある。これからの未来を明るいものにするためにも、今の平和な状態が、いかにかけがえのないものなのかをしっかりと胸に刻んで、この平和が永遠に続くように、一人一人が努力してほしい。

5年生は、川原さんのお話を興味関心をもって、真剣に耳を傾けていました。今回の学習を通して、世界に目を向け、自分たちの「当たり前」の日常を振り返る貴重な機会を得ました。憲法で保障された「教育を受ける権利」を大切に、自らの人生を豊かなものにするために、これからも学びを深めてほしいと願っています。

《平和への祈りを込めて》折鶴づくり

◎今年度2回目の縦割り活動では、平和について考える週間の一環として、全校児童で折鶴を折る活動を行いました。毎年行っている活動で、高学年の児童が低学年の児童に、懇切丁寧に折り方を教えながら、グループごとに割り当てられた色の折り紙を折っていきました。うまく折れない子や、形が歪んでしまう子もいましたが、一人一人が「平和な時代がいつまでも続いてほしい」「世界中から戦争がなくなってほしい」との願いを込めて、折り上げていきました。全校で集めた折鶴は、11月に6年生が修学旅行で訪れる『大刀洗平和祈念館』に献納することとなっています。

去る7月7日(日)は七夕でした。短冊に思い思いの願いを込めて、笹の枝に飾り付けた学年もありました。平和を祈るみんなの願いが届くといいですね。

